

## 第三十五章 怨念の海

投票日の十月七日は、前夜から降り続いた雨が一層雨脚を強め、時折横なぐりの吹き降りをまじえて切れ目がなかった。台風の影響で、中国、四国、九州を除く本州全域は厚い雨雲に蔽われ、ところによっては暴風雨の様相を呈していた。

午前九時過ぎ、大平首相は、志げ子夫人とともに、私邸に近い瀬田小学校の投票所に向かった。記者団に囲まれた首相は悪天候の影響を聞かれて、「早く小降りになって晴れてほしい。投票率は上がった方がいい」と降りしきる雨に祈るような表情をみせた。このところの選挙結果では、投票率の上昇は自民党に有利、野党に不利との傾向が見られたからである。しかし、雨は激しさを増すばかりで、投票の出足は悪く、首都圏や東海地方の各選挙区では、前回選挙より軒なみ一〇%前後も投票率が落ちていた。そのまま午後が過ぎ、投票時間は終了した。間もなく、投票率は六八%、戦後二番目に低いことが明らかとなった。

夜九時、大平首相は党本部四階ロビーの開票本部に姿を現した。

即日開票の地域の票があくにつれて、各県で強い候補者の当選が決まって行く。だが、十時半を過ぎる頃になると当選者の伸びがバツツと止まった。僅差で野党とせり合っていた候補者が次々と敗北する。絶対確実を予想され、当選を読んでいた大物で落選するものも出てきた。翌日開票分は、比較的に見て、野党勢力が強いところであり、結果が思わしくないことが予測された。

帰宅した大平首相は七日深更から候補者名簿をにらみ、一睡もせず八日の朝を迎えた。朝刊各紙は一斉に自民党敗北の見出しをかかっている。八日朝、私邸を出て党本部に向かう首相は記者たちに対して、自民の不振を認め、自らの姿勢については、「精一杯やって審判を受けることだけ考えていたから悔いはない。いずれにしろ結果は厳粛に受けとめる」とコメントした。

午前十時少し前、大平は、重い胸を抱いて党本部に入り、十時半から約二十分ほど選挙対策本部に姿を現したが、不利な戦況を見るにしのびず、幹事長室に引きこもって、自党の候補者の苦戦を一喜一憂しながら見守った。

都市周辺部では、自民党の大物や有力候補者がバタバタと落選した。十二時をまわる頃には、二、三の選挙区を残すのみとなったが、その頃には、解散前の議席数の維持も難しく、保守系無所属の当選者の入党を加えてもかろうじて単純過半数を確保できるかどうかの状況となっていた。大平首相は、押し黙って、テレビの画面を見つめつづけた。

その時、平河クラブ（自民党担当記者会）からの申込みで懇談を行うことになった大平首相は、テレビに食い入ったままなかなか席を立たず、珍しく五分間遅刻した。懇談では、予想外の不調を率直に認め、その責任については、「いま重要な立場にあるので、どう対処したらいいのか、政治をあずかる身なので、軽々に言えない。慎重にとくと考えたい」と微妙な発言をしたが、辞職せざるをえないか、という気持ちがあることがうかがえた。この感触は記者たちにも伝わり、全国に報道された。

大平首相は、午後三時に党本部に戻り、総裁室にこもった。選挙区に帰っていた伊東正義、田中六助、佐々木義武等の腹心は、首相が辞任に傾いているとの報道に驚いて、「軽率なことを言ってくれるな」、「弱気になってはいけない」と次々と激励の電話をかけてきた。

八日の午後二時過ぎ、最後の一議席が確定した。開票の結果を前回と比較すると、次のとおりである。

(今回)

(前回)

自民党	二四八	二四九
社会党	一〇七	一一三
公明党	五七	五五
共産党	三九	一七
民社党	三五	二九
新自由クラブ	四	一七
社民連	二	〇
無所属	一九	二一

自民党の当選者数は、前回（昭和五十一年）の三木政権下における任期満了選挙の結果を一議席下回った。しかし、その後直ちに保守系無所属十名の入党が決められたため、議席数は二百五十八に達し、過半数は辛うじて確保した。

大平首相は、総裁室で孤独な沈思を続けた。責任をとって辞めるべきか、止まって職務を果たすべきか、重大な決断の時が迫ってきた。首相が自分の個人的心情やこれまでの経緯に対する責任などに思いをめぐらしながらも、ここは苦しくとも困難な政局を一身に背負っていくことが、全党員・党友から選ばれた党総裁としての責務を全うする道であると肚を固めたのは、午後四時の平河クラブとの会見の直前であった。この会見は大平が選挙後初めて国民の前に見解を明らかにする公式の場である。事態の重大さから、マスコミはどつとつめかけ、記者会見場は、ものものしい雰囲気包まれた。

定刻より少し遅れて会見に臨んだ大平首相は「率直に言って予想以上に厳しい審判を受けた。これに対し、謙虚に受け止め、今後の党運営、政策運営の戒めとしたい」と語り、選挙結果の責任については、「政治全体

に重い立場にあり、誰よりも深刻に受け止めている。この結果をふまえた上で、国民の意思がどういうところまで表われているかを掌握して、これからの施政の上で生かしていく」と引き続き政権を担当する態度を表明した。

この会見で首相はさらに、その具体的方策として、『全党的体制で政治に取り組むこと』、そのため『党内実力者との会談を行うこと』、さらに『従来以上に野党との話し合いによる協調路線を重視していくこと』などの諸点を明らかにした。

三木元首相は、この日、いち早く、「政治家は責任のけじめをきちんとすべきだ」と大平首相の責任を追及する姿勢を明らかにしたが、福田前首相は「大平氏の責任を云々する前に自民党が謙虚に反省すべきだ」と大局的見地に立つて語り、中曽根元幹事長も、はつきりとした態度を示さなかった。自民党首脳の大部分は、国民の選択した与野党伯仲という事態の中でどう対処していくべきか、まずその点を見極めねばならないという態度であった。世論は、大平執行部の解散 総選挙に臨んだ目標と比較して『大敗』と批判を加えたが、大平の退陣、政権の交代を主張するまでにはいたっていなかった。党内の大方も、まだ選挙区にあつて政局の展開を模様眺めしていた。

この選挙の結果を見ると自民党は事前の世論調査と比べて極端に不振ではあったが、社会党も十六議席を減らしており、革新が勝つたとは言えなかった。さらに、新自由クラブも十三議席を失っていた。これに対し、公明、共産、民社の三党が議席を大きく伸ばした。これからわかるのは、全国的な豪雨という気象上の悪条件が支持強度の強い政党に有利に働いたということであった。因みに、この選挙の投票率が六八・〇一%、戦後二番目の低さとなったのは、豪雨に見舞われた地域の極端な棄権の増大によるものであることは明らかであり、しかも、この棄権は自民党支持層に多く、ここに自民党不振の最大の原因があった。もちろん、世論の猛反撃にあった『増税路線』、一連の選挙ムードのよさに惑わされた気のゆるみ、鉄建公団を始

めとする不正経理事件など不祥事についての報道などが、投票日一週間前頃から自民党の支持率を大幅に下降させていたことも、自民党の不振に拍車をかけたと言えよう。

選挙結果について海外のマスコミ論調はより冷静であった。たとえば『クリスチャン・サイエンス・モニター』紙は、自民党が結果的に単独過半数を確保したことから、「大平首相はこの選挙で勝利を収めた」という見解を示していた。議会制民主主義の原則から言えば、自民党は過半数を確保しており、勝ち負けの基準はこの外国特派員の述べるとおりである。また、自民党はこの選挙で、その得票率を前回の四一・八%に対し、四四・六%へと二・八ポイント増加させている。

しかし、日本の政局で問題なのは政治論的な勝ち負けであり、事態は大平首相の責任問題というかたちに展開した。このような情勢の中を、西村副総裁は十一日から党内調整に動き、三木、中曽根、福田との実力者会談が行われることとなった。

十五日の党本部総裁室での大平・三木会談後、三木元首相は、大平総裁の責任について「国民の納得のいく形でけじめをつける」ことを主張し、首相の進退問題に言及したが、それは間接的な表現だった。十六日、中曽根元幹事長は、「大平総裁が全党員に総選挙敗北に遺憾の意を正式に表明し、全党的体制をいかに築くか早急に検討する。その具体的手順としては、少数の実力者による調整機関を設け、進退をこの機関にゆだね、そこで再び大平氏が総裁に選ばれるなら、それでいい」と自らの案を提示した。この十五、十六の二日間の会談では、まだ全面的な政変にいたるとは観測されなかった。

あとは、これまで一番慎重な発言をしていたため、大平と話し合う余地も期待できる福田前首相との会談を残すだけとなった。十七日の朝、私邸を発つ大平首相に記者団は「ヤマを越えたと考えますか」と質問した。大平は「山上山ありだ。山はいくつもあるよ」と好きな詩の一節を引用して心境を示した。

大平・福田会談は、十七日午後二時から党本部総裁室で開かれることになっていた。その直前、同じ階の

幹事長室で待機していた大平首相のもとに、「福田氏は、今日は自分のことはいっさい考えない。差しちがえる覚悟でやってくる」と言つて事務所を出た」という情報はいった。これは大平や周辺の予想とはちがつて、この会談に臨む福田自身がただならぬものを秘めていることを物語つていた。

会談は、総裁室に二人だけが残り、扉が閉められると、いきなり緊迫したやりとりに入った。この内容は詳らかでないが、伝えられるところでは次のようである。

福田「党は政局の見方について混乱している。方程式は簡単だ。混乱の原因は責任論と事態の收拾論をこつちやに考えていることだ。分けて考えるべきだ。第一の責任論は簡単である。総選挙の結果、すなわち国民の審判の重さを踏まえ、かつ国民にわかりやすい処置を進言する」。

大平「それは私にやめろという意味か」。

福田「おそれ多いことだがね」。

大平「総選挙の結果を見て私にやめろ、というほどの責任が国民的判断で下されたとは思わない。……これから難問が山積しているので、全力投球で解決にあたるのが責任を果たすことになる。党の機関で私にやめろと言わない限り、やめることはできない。党の機関に移して決着をつけたい」。

福田「それはどうか。……そういう問題は党の機関でどうのこうののではなく、自分から決断すべき問題ではないか」。

こういったやりとりが続いて、大平は党の意思決定機関である両院議員総会で論議することを主張し、福田は首班決定選挙が先だから代議士会でやることを求めたという。

大平にとっては、まず問答無用で引責辞職せよ、という福田の態度が、事態收拾のためのものとは受け取れなかった。また福田にとっては、大平の両院議員総会説が、自分の責任を棚上げして、数の力で強引に居坐る態度のように見えたのであろう。

すでに第六部で述べたとおり、大平と福田の間では、政局の認識に基本的なズレがあった。大平の側からすれば、福田は「二年間で政権交代」の密約を一方的に破り、その結果、全党員党友選挙による選挙によって総裁に選ばれたという認識があった。他方、福田の考えは、予備選挙の結果を重んじて本選挙を辞退したのだから、密約を完全に否定したわけではない、したがって、大平は党運営について福田側の意向を尊重すべきであるというものであった。にもかかわらず、大平は、福田の諒承も得ずに、解散・総選挙に持ちこんだ。これは、福田をないがしろにする態度にほかならない。思わぬ選挙の結果は、こうした福田側の不満に火をつけ、一挙に爆発へと導くことになったとも言えるだろう。

いずれにせよ、お互いの不信感が触発された後では、どう言い直しても円満な話し合いに戻ることは困難である。この日を境に、福田派は態度を一挙に硬化させて、三木派の論調と同一路線に近づき、政局の流れは形式的責任論から倒閣・政権抗争へと質を変えはじめた。政局は、再び旧民主対旧自由党の対立の様相を帯びるようになったのである。

憲法では「選挙の日から三十日以内に国会を召集しなければならない」と定められているが、すでに選挙後十日以上が経過している。大平側は何としても話し合いによって党内を円満に取りまとめなければならなかった。そこで西村副総裁をわずらわし、再度、個別会談をセツトすることを依頼した。二十日の福田・西村会談では、福田前首相が、大平総裁が西村副総裁に進退を一任するのでなければ、話し合っても無駄だとして、総裁の進退一任を話し合いの前提とした。だが、自民党総裁が副総裁に進退を一任すれば、党則上は総裁に事故があった場合とみなされ、副総裁が総裁を代行することになる。田中政権末期の状態がそれであり、福田の主張は、大平に総裁をやめよ、ということになる。

そこで、大平は、調整の取りまとめを一任するという形をとったが、そこから、進退を一任したのか、しないのかという論議が生まれ、これが十日間もつづいた。

国民の間からは、いつまでたってもラチのあかない自民党の政争に対して国民不在という批判が出はじめ、政権をめぐる醜い私闘という印象が強まってきた。大平首相としては自分の心情とは全く異なる方向に流れていく政局に、針の筵に坐らされているような毎日であった。常々「引きぎわだけはきれいにしたい」と語っていた大平にすれば、自分一人で済むことなら一刻も早く辞めてサバサバとしたかったであろう。だが、辞任した後の政局の收拾について具体的な方策が見つからないままに辞めることは、党員から選ばれた総裁としてあまりに無責任である。辞めるにしても辞めないにしても、党の正規の手続きを経なければならぬ。しかし、批判者から見れば、このような大平の態度は政権に恋々として映った。

西村副総裁の努力により、二十四日に第二回の大平・福田会談が行われたが、ここでも、福田前首相は大平辞任論で一步も引かず、延々三時間にも及ぶ会談の結果は、「平行線ではないがクロスしない」という微妙な発表となった。

翌二十五日には、大平・三木と大平・中曽根の会談が持たれたが、福田の、反大平強硬論に非主流派が勢いを得たこともあって、両会談とも前回より厳しいものとなった。

この夜から、党内情勢に第二の転機が兆した。三木、福田、中曽根の非主流派の中で、いわゆる「受け皿」の問題が協議されはじめたのである。非主流派がはつきり倒閣に踏み切るためには、後継政権の座には誰がつくのか、どのような性格の政権になるのかが決まっていなければならない。三木おろしの末期、三木元首相が福田、大平にこの点を問いかけて両者をたじろがせ、その結果、福田、大平間の覚書ができたことは、すでに記したところである。受け皿論議がはじまると、これまで派内の反大平論者をおさえ、どちらかと言えば中立的な立場に立っていた中曽根元幹事長が、その態度を微妙に変化させ、これをきっかけに、三木、福田、中曽根三派の間に提携の動きが活発化した。

一連の二回目の実力者会談が物別れに終わった時点では、もう話し合いで政局を收拾する余地はほとんど



なくなっていた。三木、福田、中曽根の非主流派は反主流派となり、大平・田中の主流派に鋭く対立した。

こうして政局は再び旧民主党系と旧自由党の対立という従来の図式にかえった。それでも中間派の幹部たちが総理・総裁の分離案を提示して収拾に動いたが、大平首相は、こうした機能分離はかえって対立を増幅させるとして、これを受け入れることに難色を示した。

総選挙以来二十余日を経過し、特別国会召集の期限まで十日足らずを余すのみとなった。

二十九日、大平首相から最終案として「総裁の進退問題を含む責任問題の処理についての取りまとめを西村副総裁に一任する。取りまとめの結果についてはこれに従うものとする」という案が役員会に伝えられた。西村副総裁はこれにもとづいて三木、福田、中曽根の三者に「大平総裁も一任したのだから、三氏も調整を一任するよう」に求めたが、三者の一任が得られず、三十一日、西村副総裁は二十日余りにわたる調整工作を断念した。もはや両陣営は、それぞれの主張に従ってわが道をつき進む以外になかった。

両陣営はそれぞれ独自の戦略を立て、ぎりぎりの決戦に備えて態勢固めに入った。大平支持陣営は、党則に従い、党の意思決定機関である両院議員総会を開き、ここで党の首班指名候補として大平総裁を推すことを党議決定する方向を固めた。これに対し、反主流三派は、二十九日夜の三木、福田、中曽根三首脳会談を皮切りに、それまで舞台裏で進行していた連携工作を公然と表面化させ、受け皿の一本化に向かいはじめた。

自民党の首班指名候補が未定のまま三十日には特別国会が召集された。翌十月三十一日、反主流三派を中心に「自民党をよくする会」が結成され、結束を固めた上、翌十一月一日、三木、福田、中曽根の三者会談で福田前首相を反主流の統一首班指名候補とすることが決定された。その方策としては、反主流が数の上で優位に立ちうる代議士会（衆議院議員総会）での決着が目論まれた。

自民党では、総裁が必ず国会における党の首班指名候補となってきたため、党則には、党の首班指名候補をいかにして選出すべきか、明白な規程がない。この思わぬ空白によって、大平支持陣営は両院議員総会、

福田支持陣営は代議士会と、それぞれの主張と戦略に従ってどれだけの議員を結集しうるかが最大の目標となつた。それぞれの派閥に属する議員の数からすると次のようになる。

	衆議院	参議院	計
大平派	五一	二三	七四
田中派	四八	三四	八二
福田派	五〇	二九	七九
中曾根派	四〇	八	四八
三木派	三〇	一一	四一
中間派	二一		
無派閥	一七	一九	五七
合計	二五七	一二四	三八一

この数で見られるように、代議士会だけで見ると大平支持は九十九名、福田支持は百二十名と福田支持側が基礎数で約二十名も優位に立っている。中間派、無派閥の三十八名がどちらにつくかで勝負が決まるが、大勢としては福田支持勢力のほうが優位にあることは明らかであった。この数の論理が中曾根派を反主流派に回らせた原因だったと推測される。

一方、両院議員総会でみると、大平支持は百五十六名、福田支持が百六十八名と両派の勢力はほぼ拮抗するが、中間派や無派閥に大平支持勢力が強く、大平側が優位になる見通しであった。その意味からすれば、大平支持陣営、福田支持陣営ともそれぞれ数の上で自派に有利な土俵を選んで戦う道を進んで行ったわけがある。

この間に、十月二十七日には対岸の韓国の朴正熙大統領が射殺されるという事件が起こり、大平首相はいったん葬儀へ出席の方針を決めたが、党内の抗争のために、代わって岸元首相が特使として葬儀に参列した。首班指名のための第八十九回特別国会が十月三十日召集された。会期は十一月十六日までである。

衆議院は開会して議長は灘尾弘吉の再任と決まったものの、首班指名は持ち越された。十一月二日、主流派は午前十一時三十分から党本部九階の会議場で両院議員総会を開くこととした。一方、反主流派は、同日午前十一時に院内で代議士会を開き、百十五名の衆議院議員が出席して、福田前首相を首班指名候補に推した。主流派の両院議員総会の舞台である党本部のホールには、十一時十五分過ぎ頃、中曽根派から五議員が入場し、中間派からも予定通りの出席が得られ、出席者は、衆議院議員百二十五名、参議院議員七十五名、合計二百名で構成員の過半数を超えた。この総会で大平を首班指名候補に決定した。

こうして自民党は、二人の首班指名候補を持つという前代未聞の状態となったが、衆議院で投票となった場合、どちらが選ばれるかは、全く予断を許さなかった。一応は大平が優勢と見られたが、病気や態度の不明な議員が十五名あり、その動向によつて優劣が決まるきわどい情勢であった。また、両院議員総会にも出席した反主流派議員や中間、無派閥の議員に対しては、所属派閥やそれぞれの陣営から翻意を促す工作が進められることも確実とみられた。

この日の夕刻、舞台は院内に移った。灘尾衆議院議長は「同じ党から、二人の首班指名候補が出ることは好ましくない。自民党の混乱を国会に持ち込まれては困る」と本会議の閉会に難色を示した。

これを機に自民党は分裂を覚悟で本会議に突っこむか、話し合いによつて両陣営最後の調整をはかるか、ぎりぎりの瀬戸際に追いこまれた。西村副総裁、金丸国対委員長、安倍前官房長官らが来年一月の定期党大

会で総裁の改選を含みとする妥協案をもって大平、福田の間の調整を働きかけた。しかし、反主流の内部には分裂しても決戦に突入すべきだとする強硬論の突上げも強く、事態は極度に緊迫していた。

二日の衆議院議院運営委員会の理事会で同一党内から二人の首班指名候補が出ることに難色を示す野党理事に、反主流派の理事が「新会派の結成準備中である」（自民党を脱党して新党派を作る）と発言したと言われ、この噂に院内は一瞬衝撃を受けた。この日は、反主流派の引延ばし戦術のため本会議が流れ、十一月三日の文化の日、四日の日曜日の二日間の休日に入って、決戦は週明けに持ち越された。

自民党のこのような動きに対して、野党各党の動きが微妙になった。社会党は、野党が結束して政権を奪取しようと呼びかけ、民社党は、自民党が分裂したら連合か連立の可能性があるものとして、その事態を積極的に待つ姿勢を示した。公明党、新自由クラブの動きも予断を許さなかった。

ここまでくると、自民党内部の対立は野党各党を巻きこみ、政局は、政界再編成前夜の様相を呈するにいたった。首班指名選挙にかけられているのは、二十五年間にわたって政権を担当してきた自由民主党の命脈が尽きたのか否か、という問題であった。自分の氏名を明記して投票しなければならぬ議員にしてみれば、それは、政局の動向への選択であると同時に、自らの政治信念が問われることを意味した。

大平にとって、党の分裂を回避する道は勝つこと以外になかった。野党との連立を意識し、民社党、新自由クラブに積極的に働きかけているとの噂される反主流派を党内に踏み止まらせるには、大平が福田に勝つてその道を閉ざす以外に方法がなかった。表の話し合いや多数派工作と並行して裏では野党各党に対する働きかけが両陣営から進められた。

遅れに遅れた首班指名投票は十一月五日に予定されていた。その当日の午前に、大平・福田は会談を行った。ここで論じられたのは、翌年に参議院選挙を控えて、党の分裂に強い危機感を抱いた参議院自由民主党から出された案で、「来年一月の党大会で新総裁を選任する」というものであった。大平・福田ともにこの案

に歩み寄るかに見えたが、反主流派の強硬論者に促された福田が、大平にその場合に総裁に出馬しないことを約束するよう迫ったため、大平は、「現に総裁であるものが、いつ辞めるなどと言える道理はない」と強くこれを退けたため、会談は決裂した。

このような事態となったため、首班指名の本会議開催は、一日延期され、翌六日の午後一時から行われることとなった。

この間に、公明、民社両党は、それぞれの党首を立てて本会議に臨むことが最終的に決定された。社会党、共産党とも自民党の党内抗争に巻きこまれることは避け、独自の候補で戦うことが決まって、新自由クラブの去だけが残された。大平派では田中官房長官、佐々木義武副幹事長らが中心となり、十月末から新自由クラブとの接触がはかられていたが、五日夜、大平首相と新自由クラブの河野洋平代表との間で最終的合意が確認された。

決戦当日の十一月六日、大平首相は午前六時前には起床し、最後の点検を行った。その結果、第一回の投票で新自由クラブの四票を除き、五票前後の差で勝ちと見られた。

午後一時、首班指名の本会議が開かれた。三、四名がひっくり返れば逆転する僅差だけに、投票結果を待つ間、両陣営は、胸の痛くなるような緊張を味わった。いずれも過半数を制する見込みがないことから、決選投票になることが予想された。

第一回投票の結果、大平正芳一三五票、福田赳夫一二五票となり、ついで飛鳥田一雄（社会）一〇七票、竹入義勝（公明）五八票、宮本顕治（共産）四一票、佐々木良作（民社）三六票、田英夫（社民連）二票、無効七票となった。

大平は一位となったが、むろん過半数にはほど遠く、大平、福田の決選投票を行うまで、衆議院本会議は休憩された。福田が決選で降り、党は大平一本でまとまるか、それとも福田があくまで決選を争うか、さら

に野党の各党が決選投票でどのような態度に出るか、不気味な二十分間が過ぎた。

福田は決選に出るときまじり、投票は三時二十分に開始された。その結果は次のとおりである。

大平正芳 一一八票

福田赳夫 一一一票

無効 二五一票

白票 一票

大平は再び首班に選出された。

参議院本会議の投票でも、決選投票で、大平は九十七票を得て、第一位の議決となった。ついで、飛鳥田一雄五二票、無効一票、白票は八七票であった。

この記名投票による決着はさまざま人間模様を浮彫りにした。大平、田中の両主流派からは一人の落ちこぼれもなかったが、福田、三木、中曾根の反主流各派は、それぞれ派閥の統制に従わないものを出した。

大平は首班に指名されたあと、院内を回ってから官邸に入ったが、記者たちのインタビューに答えて、「熱いお湯の中に長い間つかり通しだったのが、やっと解放されたという感じだ。しかし、これからもっと熱い湯に入らなければならぬので大変だと思っている」と述べた。

大平首相は四時半、首相官邸で首相・党五役会議を開き、その日のうちに疲れ切った身体をひきずるようにして福田前首相、三木元首相をそれぞれ私邸に訪れた。これに対し、反主流派は翌七日、会議を開き、「是非々々」で臨むことを申し合わせた。

最初の関門は党三役の人事であった。大平首相は、「人事は公正にやる。幹事長は総裁派閥からは出さない」という方針を打ち出したが、反主流側は、一本化し、最終判断は三木、福田、中曾根とする、との方針を決めたため、三役人事は膠着した。

八日、首相は、党人事を後回しにして組閣を進めることとし、午後八時四十分、第二次大平内閣の組閣が完了した。文相だけは新自由クラブの田川誠一幹事長を含みとして総理が兼任することとなったが、田川が離党して入閣することを新自由クラブが拒否、結局、二十日大平派の谷垣専一が起用された。主な閣僚は、次のとおりである。倉石忠雄法務、大来佐武郎外務、竹下登大蔵、武藤嘉文農水、佐々木義武通産、地崎宇三郎運輸、藤波孝生労働、後藤田正晴自治、小淵恵三総務、宇野宗佑行管、官房長官には大平首相の腹心、伊東正義が就任した。この人事の特徴は、多くの新人が登用され、外相にエコノミストとして世界に広く知られていた民間人の大来佐武郎を起用していることであつた。

党人事は組閣後一週間たった十一月十六日に決まつた。幹事長には中曾根派の桜内義雄が起用された。荒れ果てた党内融和のためには、その誠実な人柄が適任であると見られたのである。また、前回幹事長の就任を反対された鈴木善幸が手なれた総務会長につき、福田派からは福田の後継者と見られる若手の安倍晋太郎が政調会長に登用された。ここにも若い人材育成の配慮があつた。

こうして人事もようやく終わり、さしもの四十日間の抗争も終止符が打たれた。

この抗争の最終場面近く、党分裂の危機を回避するため最後の努力を続けているとき、大福間の調整に奔走していたある国会議員にむかつて大平はこう言つた。

「僕の名誉は傷つくだけ傷ついてしまった。もうこれ以上傷ついても失うものはなにもないだろう。僕の名誉を損なうことで先方が満足するなら、どんなことでも甘受しよう……」。

数の対決の上で大平は勝つたが、最も深く傷ついたので大平であつた。そして、多数決の決着は一つの解決ではあつても問題の解決ではなく、むしろかえつてその対決を内部に熾火として温存させた。

表決の終わった翌七日の朝刊は、大平政権の傷だらけの再出発を報じた。

この「四十日抗争」の間に、すでにこの年二月に勃発していたイラン革命は、一層その火の手を強め、ついに十一月四日には革命派の学生によるテヘランの米大使館人質事件が発生した。失脚したパーレビ前イラン国王が病氣治療のためにニューヨークに移ったとの報を聞いて、イラン各地で一斉に反米デモを起し、パーレビの送還を要求するという空気の中で起こったのである。折しも、本会議で首班指名投票を争うという情勢の中でこの知らせを聞いた大平首相は、「厄介なことが起きたな。秩序もへちまもあったものではないな」と嘆息したが、まだこの時点では、この事件が日本にとって、どれほどの意味を持つものかは、誰にもはっきりした認識がなかった。